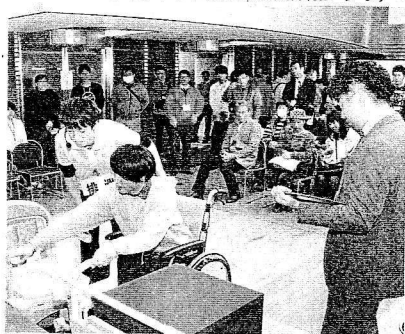


# コンテストの審査風景 (広島市中区の広島県情報プラザ)



## 介護担うプロの誇り

### 広島の若手職員ら 技術競う大会

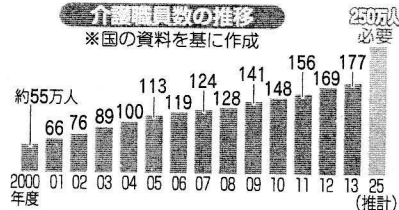
カウントダウン  
**2025年**

10年後の超高齢社会を支えるには、250万人の介護職員を確保する必要があるという。だが、介護の現場は慢性的な人手不足だ。この仕事の魅力を知っている人を知ってもらおうと、若手職員らが介護技術を競う「第1回ひろしまケアコンテスト」が月下旬に開かれた。出場者から伝わってくる情熱と誇り。こんな担い手があつてこそ、「尊厳ある老後」がかなえられる。

(編集知美)

#### 介護職員数の推移

※国の資料を基に作成



コンテストは広島市と市老人福祉施設連盟の主催。市内の高齢者福祉施設で働く勤務歴5年未満の職員26人が、「食事」「排せつ」「入浴」の3部門で競った。要介護者に見立てたモデルを相手に7分間ずつ試演。大学や専門学校教員たち計6人が審査を務め、手順や声掛け、本人の自立を促す介助か、などの点に注目して採点した。額に汗をかき、笑顔で排せつや入浴の手助けをする選手たち。会場では約200人の観客が熱心に見入っていた。一人一人に拍手を送っていた。

厚生労働省によると、2013年度の介護職員数は約177万人。25年度には30万人不足すると言われている。いかに人材を確保し、育成に力を入れるかは社会的な課題だ。

「介護の現場では、職員はいつも脇役。若い人たちが頑張っている姿に光を当てたかった。会場を見渡しながら、同連盟の藤井紀子会長は言う。『きつくてしんどい仕事というイメージが先行しがち。でも、高い専門性や技術が必要で、やりがいのある仕事なんです。この仕事の本質を多くの人に知ってもらいたい。それが介護職の社会的地位を上げ、処遇改善につながる一歩だと思う』」

## 各部門で優秀賞に輝いた受賞者

### 【入浴部門】

吉田佳代さん(21)

＝東区の介護老人福祉施設  
サンヒルズ広島勤務

### 【排せつ部門】

永江伸子さん(25)

＝佐伯区の特別養護老人ホーム  
石内慈光園勤務

### 【食事部門】

井上あゆみさん(24)

＝中区の特別養護老人ホーム  
悠悠タウン江波勤務

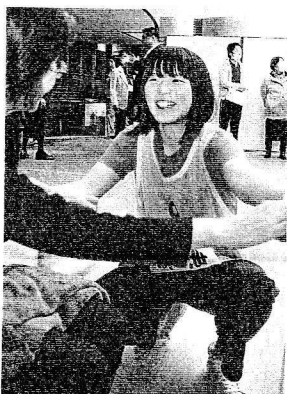
## 父の死胸に日々成長

「初心に戻れた。明日からまた頑張ります。思わぬ受賞に声が上がる。就職して4年。日々の業務に手応えを感じられるようになったとき、職場の上司に後押しされて出場を決めた。介護職を目指したきっかけは、父の死だった。高校1年生のとき、原因不明の難病に父が倒れた。1年間入院を繰り返して、



## 寄り添う姿「いいな」

「お湯が散ってしまったので、スポンを替えていただいていたんですか。利用者が排せつを失敗してスポンを汚したというシチュエーション。相手が恥ずかしいよう、さりげなく語り掛ける。観客まで、心が温かくなる笑顔で。



モデルに視線を合わせながら、笑顔で接する永江さん

## 感謝された手紙宝物

高校生のとき、大きな病院を受診した。受付のフロアを見渡すと周りは高齢の患者ばかり。「ああ、日本って本当に高齢化社会なんだ」。このとき、このお年寄りたちを支えるのは自分たち若者なんだ、と自然に思えたのだという。



「腰や膝、痛いところはないですか。モデルに優しく声を掛ける吉田さん

「大変な仕事やな」とため息をつくこともよくあった。けれど、少しずつ介護の喜びを感じられるようになってきた。同時に就職。この春で、入社4年目になる。最初は、宝物がある。数カ月間、80代の女性の担当から外れたときに女性の娘さんにももらった手紙だ。小さい紙にきれいな字で「ありがとうございました。母と私は、吉田さんに心から感謝しています」とあった。うれしくて大切にしまっていた。受賞はいい機会。そろそろ新人入会を卒業して後輩のお手本にならないと。来年1月、介護福祉士の資格試験が待っている。

つたことが今も悔やまれている。自分に介護の知識や技術があれば、もっと父の苦しみを和らげられたんじゃないか。悔しさをきつ

モデルの表情を注意深く確認しながら、食事の介助をする井上さん

かけに、人を直接助けるところができるこの職に就いた。いつも通りできたというコンテスト。「体調はどうですか」「スプーンをお持ちしましょうか」。細やかな声掛けと笑顔が高く評価された。「他人に介護されるのって抵抗があると思う。こちらがケアさせていた方がいいという思いを忘れず、これからも利用者に向き合っていく」